留学から国際交流へ

理事　加藤邦男

留学という言葉は日本語独特のものだと指摘する人がいる。言われてみるとそうである。留学は、英語ではgo abroad for studyやstudy abroad、フランス語ならaller étudier à l'étrangerと言ってすます。この頃は、若い学生のあいだで留学という表現はあまり聞かない。外国に行くことが特別なことではなくなったからである。私が学生の頃、すなわち1950年代から60年代にかけての頃は、外国はまだまだ遠い憧れの異国であった。

運良くフランス政府給費留学生に選ばれて、パリの国立美術学校でエルベ、アルベール両先生のアトリエに私が留学できたのは1959年のことであった。アルベール先生に師事することは、すでにパリに留学されていた理事の川崎清先生が増田友也先生に書き送られた情報に従って決めたことである。神戸港からメッサージュリー・マリチームという極東航路の客船ラオス号に乗船するのに、畏れおおくも森田慶一先生に神戸港まで同行して頂いた。その時、フランスから川崎先生と交換で来日した若い建築家メイモン氏が神戸に着いたばかりであった。30日をかけてマルセイユ港に到着、さらに2日をかけてはるばるパリに着いた。その時のパリは、あらゆる排煙を吸い込んで建物はほとんど真っ黒で、「パリは黒かった」のである。現在のように建物の立面が洗われて美しく明るい砂岩の肌を回復して「白くなる」のは、1970年代以降のことである。

その後、京都大学建築学教室の日仏学生交換が本格的に始まり、少なくとも約10年間は建築研究協会が資金助成を行った。これは森田慶一先生、増田友也先生を始め当時の諸先生方の決断に負うところが大きかったのである。実際の世話は増田先生の研究室で行い、多くの学生が、この制度のおかげで、毎年一名ずつ京都とパリを往来し、一時はベルギーのサン＝リュック建築大学、チューリッヒのスイス連邦工科大学（E.T.H.）にまで学生交換の枠を広げ、教官の相互訪問も行われた。学生運動の激動期を経て時代の状況も変わり、美術学校の建築学科は解体し、学生交換は現在のパリ・ラ・ヴィレット建築大学との交換に移行し、また資金面では、文部省招聘の給費留学生制度を活用することになり、現在に至っている。その間、実に多くの優秀な若手研究者がこの制度の恩恵に浴した。故前川道郎教授、故玉腰芳夫助教授、前田忠直教授、伊従勉教授、中村貴志（鳥取環境大学教授）、白井秀和（福井大学教授）、田路貴浩（明治大学助教授）、平尾和洋（立命館大学助教授）、千代章一郎（広島大学助教授）、松本裕（大阪産業大学講師）らの諸氏の名前を挙げることができる。手元に残る資料の断片では、1977年から1996年の期間に派遣した建築学教室の修士・博士課程学生は23名、1981年から1996年の期間に受け入れたフランス人研究者は20名にのぼる。ほとんど途切れずに交換した実際の総数はこれを大きく超えるのである。帰

国したフランス人にも、研究者として研究機関で指導的立場で活躍している方々が少なくない。その結果学生交換が新たな交流を生み、それが現在では京都大学を超えて、日本の諸大学に、またフランスの諸教育研究機関に広がっている。私が京都大学を定年退官した翌年の2000年３月に、パリの日本文化会館の大ホールで、この交流に関わったフランスの建築家、研究者、教官たちが多数あつまり、パリ市の助成を得て、「建築・都市―交差する視線」と題するシンポジウムが開催され、私はその基調講演に招かれた。

その後、建築学教室では竹山聖助教授が世話役で交流を継続している。私は大阪産業大学で同じパリのラ・ヴィレット建築大学と交流を始め、すでに日仏６名の学生が交換された。建築研究協会が種をまき育てた学生交換が、研究者の交流にも発展し、また京都大学の枠を超えて盛んになり、さらにその他の欧米諸国との交流にまで波及して成果を挙げていることをここに報告し、改めて先達の先生方に謝意を表したい。